
三珠の社と記憶を探す旅

桜咲 雪紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三珠の社と記憶を探す旅

【NZコード】

N7900X

【作者名】

桜咲 雪紅

【あらすじ】

戦いを終わらせる代償として友の記憶を失った主人公。記憶を戻せる可能性があると言われ、“三珠の社”を巡ることにつた。穏やかで抹茶大好きな治癒魔導師と、時々俺様?になる火の魔導師、主人公の大切な家族の火の魔導師（意外と手先が器用）、“空の珠”が人型をとつた空の魔導師、防御力だけ桁外れな水の魔導師、偉そうな王子様の風の魔導師。

闇と光とは違うステージで繰り広げるドタバタアクションストーリ

第一話『禁断の森』

ドサッ

「痛つて～」

左腕に翼の紋章がある女の子がモロにぶつけた頭を擦る。もつとちやんと着地させてくれたつていいじゃないか。“空の珠”的馬鹿野郎。

「痛そうだな」

斜め横から声が聞こえた。男の声のようだ。結構低い。だが聞いたことのない声だ。斜め横に視線を向けると、見知らぬ男が立っている。年齢は十代後半か二十代前半ぐらいか。腰には剣を帶びている。やっぱり見たことのない顔だ。・・・いや・・・なんとなく見たことのあるような。

「俺は“空の珠”だ。もつ忘れたのか」

「はあ！？あんた珠なんじや・・・・」

「最後の約束忘れたのか？その記憶は消してないはずだが」「顔を顰め、男を見つめる。その顔にはありありと「こいつ、なに言つてんだ」と書いてある。男は苦笑して

「まあいい。俺の名前は天空 空だ。覚えとけ」

「一応覚えといてやろう」

偉そうにそう言つと、彼女はパンパンと体を叩き、埃を払つて立ち上がる。周囲を見回し顔を顰める。

「どじだよ・・・・」

「どつからどう見ても森だな」

空の言つとおり左を見ても右を見ても木しかない。下は落ち葉、上からは木漏れ日が差し込んでいて、上下左右を三回ぐらい見て、考え込む。この森、なんか見覚えあるような・・・気のせいいか？

「まあ『禁断の森』以外だつたらどじでもいい『空』は『禁断の森』だぞ」

しばしの沈黙の後、彼女の口から掠れた声が漏れた。

「…………嘘だら」

彼女はがくりと頸垂れる。『ここ』に来て酷い目にあったことがある。よりもよつてこの『禁断の森』に落ちるとば。

人々が恐怖の念を込め『禁断の森』と呼ぶこの森には、凶暴な魔獸が数多にいるのだ。

代表例として口から火の魔法を使うヘルハウンド、風の魔法を駆使するオルトロス、水を操るフェンリル、口から吐く息で敵を石化させるカトリス、冥界の番犬とも地獄の番犬とも呼ばれている三つのケロベロス等々。上げればキリがないが、とにかくここには数多の魔獸が生息している。別名『魔獸の森』とも『帰らずの森』言われている。

更に、鷲の上半身にライオンの下半身を持つグリフォン、野生のドラゴンまでいると謂われている森だ。よく無謀な挑戦者が森へ入り、骨も残さず食われるとか……。

「最悪だ。よりによつて『禁断の森』なんて……。ずいぶんいい所に落としてくれたね。『空の珠』」

「空と呼べつて言つただろ。それに俺だつてどこに落ちるかわからねえんだよ。恨むんなら自分の運の無さを恨むんだな」

なんて言つようだ。勝手に珠の中に呼びつけ、勝手に落としこいて「自分の運の無さを恨むんだな」つだつて？

「ふざけんな！アホ珠」

「アホ珠言つたな、運悪女」

「んだとーこの『グルルル』

彼女の声は何かの唸り声によつて聞こえなかつた。彼女と空がそつと声の方を向くと、赤い魔力のオーラを纏つたヘルハウンドがいた。もちろんフレンドリーな雰囲気は皆無である。一人の背中を大量の冷や汗が滝のように流れていく。『ぐりと睡を飲み込み、小さな声で

「どうする？」

「どうするも何も・・・戦うしかないでしょ」

「バカ言え。ヘルハウンドだぞ？勝てる訳無いだろ？が。俺は今、生身の人間なんだぞ。それわかつてんのか？」

「私だつて人間だよ」

会話がしだいに大きく、刺々しくなつていく。一人ともすでにヘルハウンドの事など眼中にも脳内にもないらしい。ある意味すごいかも・・・。

「お前魔法でどうにかしろよ！それでも戦いの国の後継者か！！？」

「そういうお前こそ“空の珠”なんだろう。どうにかしりよーその名前はただの飾りか？ああ？」

『 やんのか！？ゴラ』

二人は同時に同じ台詞を言い、睨み合つ。そのまま喧嘩に発展しそうになつた二人の前から、地を蹴る音と低い唸り声が・・・。

『 あつ・・・・・』

きつぱりさつぱり忘れていたが、こいつが居たんだっけ・・・。

「ウ、ウ、ウ、ウ、ウ、・・・グオー！」

『 ギヤー！..!』

悲鳴をあげ、反射的に抜剣し飛び掛る空と女の子。

ザシユ

『 グオー！』

女の子の刀はヘルハウンドの左目に、空の剣はヘルハウンドの右耳に突き刺さつた。ヘルハウンドの咆哮が響きわたる。首を激しく左右に振り、二人を振り落とす。

「うわつと・・・

「げは・・・

くるりと一回転し、地面に着地した女の子と、派手に頭から落ちた空。結構痛そう。女の子の上にヘルハウンドの足が迫る。周りが影になつたせいでそれに気づいた女の子は、刀を持ち上げて防御体勢をとる。

「重つ」

歯を食い縛り耐える女の子。ともすれば碎けてしまいそうな膝に力を込める。

ひゅん

左側から何か来る。女の子は風の魔法でヘルハウンドの右足を押し返し、後ろに飛ぶ。一秒後、女の子が立っていた場所を鋭い鉤爪が空を廻ぐ。

「あつぶね」

危うく体が真っ二つになるところだった。ヘルハウンドは注意深くこちらを観察している。女の子はくつと歯噛みする。このままじゃ無駄な時間を食うだけだ。

瞑目し、魔力を高める。不可視の力で羽織っていた上着が持ち上がる。

「全てを白銀に染め上げる雷の刃よ。我が求めに応じ、敵を打ち滅ぼせッ」

言い終わると、天から白い白刃のような雷が落ちてきた。その雷は視界を白く染め上げていく。ヘルハウンドは顔を左右に振りながら暴れている。

女の子は空を立たせ、木に飛び乗り逃走。

「はあ、酷い目にあつた」

まさかいきなりヘルハウンドが現れるとは、予想外だ。空とかいう男がいつの間にかいなくなっている。どこかに落つことじてきたか。まあそんな事はいいとして、この森の出口はどこだよ。

「まいつたなあ」

これじゃあ一生森をさ迷うことになるかも。「冗談じゃない。やっぱ体力使うけど風の魔法で上から行つたほうがいいかな。と考えていると

「優香ちゃん?」

聞いたことのない声が自分の名前を呼んでいる。優香はゆっくり振

り返る。そこには穏やかな雰囲気を纏っている女の子と、驚き顔の男と、すごい勢いで駆け寄つてくる男と、辛そうに顔を歪ませている女の子がいる。あと空がいる。なんだろう。最初の三人、妙に懐かしい気が……。

「優香……よかつた、無事で」

いきなり見ず知らずの男に抱きつかれ優香は対応に困り、空に視線を流す。

「お前の友達だ。お前の記憶にはないだろ？」「な

「記憶……」

ズキンと頭に痛みが走った。左手で頭を押さえ、息をつめる。なんだろう。なんかが抜けてる……いや足りない気が……。掴めそんなほど近く、触れないほど遠い場所に何かがある。

優香は抱きついてきた男を突き飛ばし、数歩後ずさる。

「お前ら……誰だよ。何で私の名前知ってんだよ。何で記憶なのに懐かしく感じるんだよびっくり」
怯え交じりの声で叫ぶ。まあ彼らに怯えているのではなく、記憶のない自分自身に怯えているのだろう。

「俺の名前は暁連夜。あっちのが浅緑 美麗 曙 克弥だ」

どっくんと優香の体内なかで何かが歓喜の声を上げる。その名前は聞いたことがある。どこでかはわからないけど、深く、強く、刻み付けられた名前。

「暁……私と同じ苗字」

「お前がくれた苗字だからな」

優香は怪訝そうに顔を顰める。まあ自分に記憶が抜け落ちているらしいから記憶がないのもわかる。だいたい、何で私は記憶を失くしたんだよ。しかも友達のだけ。絆寒の事はちゃんと覚えてる。聖藍も翡翠も風華もちゃんと記憶にある。それなのに……。

無意識に唇を噛み締めたとき、遠くから悲鳴が聞こえた。

優香ははっと顔を跳ね上げ、耳を澄ます。・・・聞こえる。女の子の悲鳴だ。

だつと走り出す。何でこの森に女の子がいるんだよ。つたぐ。

その後に連夜達が続く。

「ちよ・・・も・・・つ・・・限界」

女の子の声がはつきり聞こえた。それと獰猛な唸り声も。

「いた」

大きな木の向こうに女の子が一人立っている。その周囲に結界が張られていて、リトルドラゴンがブレスを浴びせていた。女の子の顔は苦痛に歪んでいる。限界が近いのだわう。

「炎よ」

言下に炎が現れ、リトルドラゴンに向かつて突進していく。その隙に女の子の方に行く。

「ほら、こっち来い」

女の子は大きく目を見開き、嬉しそうに笑み崩れる。

「優香」

「はつ？」

じつと女の子を見つめる。見たことない顔だ。記憶にはない、とうことだ。だが先ほどのように懐かしさがこみ上げてくる。とにかく女の子を抱き上げ、連夜に押し付ける。そしてリトルドラゴンに向き合い、刀を構える。

「吹っ飛ばすだけにしといてやるよ」

風の魔法を全開にして、リトルドラゴンを他愛無く吹き飛ばす。

「はい、終了」

肩を揺すりながらつまらなそうに言つ。風は優香に抱きつき「生きて良かつた・・・ホントに・・・」

「えつと・・・誰？」

「何いってんのさ。碧空　風だよ。忘れたの？」

「・・・・碧空・・・風？」

何故かその名前だけは胸に響いた。だがやはり思い出せない。それがどうしようもなくもどかしかった。

「お前一人でこの森に来たのか？」

克弥という男が凪に聞く。凪は首を左右に振り、後ろを指差して

「竜也と一緒に……」

凪の後ろには誰もいない。凪の顔からみるみる血の氣が失せていく。

美麗が一言

「はぐれたんだ」

その言葉を合図に凪はポツケから赤い玉のよつなものを取り出し、地面に打ち付ける。地面につくと玉は弾け、赤い煙が立ち上つてく。信号弾のようなものだろうか。

しばらくすると、男の子がやって来た。おそらくさつきの信号を見て必死に走ってきたのだろう。せえぜえと荒い呼吸を繰り返している。

「竜也。早かつたね」

「急いできたんだよ。それより、優香が、いたつて、ホン、ト？」

「そこに」

優香は微苦笑を浮かべる。もしかしてこの人も私の友達なのか？まったく記憶にないんだが。ここまで記憶にないといつて見事だと妙なところで感心してしまう。竜也という男は優香を見て、何度も目を擦る。夢でも幻でもないとわかると、嬉しそうに笑つて

「本物だ・・・やつと見つけた。つかその左腕の紋章なに？」

「左腕の・・・紋章？」

左腕を見てみるとそこには紅い翼のような紋章が描いてあった。優香は目をパチパチさせ空を睨む。

「これ、あなたの仕業？さつさと消してよ」

「それは出来ない。その紋章は俺とお前の契約の証だからな」

「はあ！？」

言い争いを始めた優香と空から視線をそらし、その後ろへと視線を流す竜也。

「彩夜・・・お前もいたのか」

「知り合い？」

「はつ？敵だらうが」

「知り合いなら助かつた。彩夜を闇に送つてやつてよ。お願ひ」竜也の言葉などまったく聞かず、そういう優香。彩夜は意外そうな顔でこちらを見る。竜也は嫌そうにしながら

「仕方ねえな。お前らはどこ行くんだ？それとそここの男、誰だよ」空の事を指して言う。空は腕を組みつつ名乗る。

「“空の珠”だ。今は人型をとつている。名前は天空 空だ。それから優香は俺と一緒にルーネ大陸に行く」

「“空の珠”？じゃあお前か。優香と契約いた珠は。しかもルーネ大陸つてこの森の向こうにあるところじやん。そこ行くのか？」

「やーーうー」と

「あのや。早くこの森から出たいからちやつちやと行動してよ」優香がイライラしながら一人を睨みつける。

第一話 サンダーライト国

ところが、彩夜と竜也は雷の国の方へ、優香達はサンダーライト国に向かつて歩き出した。

この世界には一つの大陸があり、その大陸を真つ二つにしているのが『禁断の森』である。簡単に言えば、『禁断の森』が赤道みたいなものだ。そして、片やルーネ大陸、もう片方がルシーネ大陸と呼ばれている。

“空の珠”によると封印はまだ完璧にはすんていなくて、三珠の社を見つけないといけないそうだ。そしてルーネ大陸のどこかに“空の社”と“海の社”と“地の社”があるらしい。

だが、“空の珠”本人にもルーネ大陸のどこにあるかはわからないらしく、地道に探すしかないみたいだ。

そういうわけで、優香達一行はここから一番近いサンダーライト国を目指すことにしたのだ。が・・・

「ねえ、いつまで歩けばいい訳?」

何回目かわからぬ質問を口にする。いつたいどこまで行けばそのサンダーライト国に着くのだろうか。町の影はあるか、人影すらない。

「あとちょっとだ」

これまた同じ言葉を返す空。体力のない凪と美麗はすでに限界に近づいているらしく、肩で息をしている。それでも休むかないと倒れそうだ。連夜と克弥は表面上は平気そうだ。心中はわからないが。

「だらしねえな」

空は凪と美麗を見て呆れたように首を振る。魔法ですっ飛ばした方が速いな。

「ちんたら歩くのもどいから風の魔法で一氣に行くよ。皆、集まつて」

優香の声に空を除く全員がホッとした表情を露にする。やはり疲れ

ていたらしい。全員が集まつたのを確認すると、優香は魔力を高め

「風よ」

優香達を包んだ風は、空が示した方向へ進んでいった。

サンダーライト国

ここはサンダーライト国の傭兵達の溜まり場の酒場。その酒場に一人の場違いな少年がいた。

こちらでは珍しくない茶髪に、この国の貴族の象徴でもある碧眼。そして貴族とは思えないほど質素な服装。腰には刀を帯びている。おまけに周囲の傭兵が浴びるように酒を飲んでいるのに対し、一人で黙々と飯を食っているのだ。傍らに置かれたグラスの中身は、酒ではなくただの水だ。

まったくもつて酒場の客らしくない。

しかし、大抵の男はさしたる関心を払わずにいた。せいぜい「変なガキだ」的な視線で少年を見るだけに留めている。だが、どんなときでも例外はある。

「おい、聞いたか？ルシーネの話

「聞いた聞いた。何でも火の国と雷の国の王女が消えたんだって？」
「見つけた奴には報酬に100・000・000ルースくれるんだろ？儲けもんだよな」

腰に剣を帯び、いかにも傭兵っぽい男達が酒を片手に大声で話している。少年は変わらず食事をとりながら、微かに目を動かす。

「だが目撃情報はあるか、生きているのかすらわかんないんだろ？」
「そうらしいぜ。もう死んでたりしてな。わっはっはっはっ」

「おい、店主！酒追加だ」
「こっちもだ

「俺らんところは飯追加だ」

そんな注文の声が飛び交う中、五人の若い傭兵達は少年を目に留めちよつとからかってやろうといった感じでニヤツと田配せしあう。まずはリーダー格の男が声をかける。

「おいおい！傭兵が酒場来て水かよ。お前それでもタマつこてんのか？なつさけねえ」

酒場がしんと静まり返った。別に怯えているわけではなく、この後の展開に期待しているのだね。すなわち（喧嘩だ喧嘩。やつちまえ）等と思っているのだ。

少年は食事の手を休めず

「俺が何を飲もうが俺の勝手だ」

そう言つたのみ。男共は席を蹴つて立ち上がる。元々喧嘩に持ち込むつもりだったので、好都合だと思つたのだろう。

「喧嘩売つてんのか！てめえ」

いや、喧嘩売つてのはお前らだろ。という突つ込みを入れる者はおらず、男共は少年に近づいていく。早くも袖を捲くっている。やる気満々だ。少年は飯を綺麗に平らげ、水を一気に飲み干すと、カウンターにお金を置き男共に田に向けることなく歩いていく。

「無視んじゃねえ！」

男その一が少年に殴り掛かる。少年は最小限の動きでそれをかわし歩いていく。

「うおお」

今度は男その二とその三が同時に襲い掛かる。少年は蠅を払つよつな仕草でそれらを受け流す。男達の動きを一切見ずに・・・だ。残つた二人が刀を抜き斬りかかる。少年は小さく何かを呟き、掌を広げ何かをしようとした。

「きやあ～」

「突つ込むー！」

ドカーン　ガラガラガラ

悲鳴と共に酒場の壁（木造）が大破した。そしてその壊れた壁の破片がリーダー的男にモロに当たる。リーダー的男は他愛無く倒れてしまう。

「つ・・・痛て〜。あれ？あんまり痛くない？」「痛いですんでよかつたよ。ホントだ、あんまし痛くない。皆、怪我ない？」「大福

が埃塗れになっちゃった。まあいつか、もう一個あるし」「この馬鹿！勢い出しすぎなんだよ」「あ～らう。これは弁償かな」「着いたか。だがこれはいささかやり過ぎなような」

エベール越しにムクリと起き上がった六人分の影。その影の下には哀れというべきか自業自得というべきか男一～四までの男が呻いている。どうやらあまり痛くなかったのはこいつらのお陰らしい。

「ここがサンダーライト国か。つつてもなんかの建物の中だけど」「・・・火の国の・・・王女・・・」

「間違いない。手配書と同じ顔だ」

「ん？」

埃のベルが晴れて飛び込んできた六人の顔を見た酒場の男が手配書と見比べてる。真っ黒な髪と同じく真っ黒な瞳。刀は一本。髪は腰に届きそうなほど。いつも男ののような格好をしていて、言葉遣いも男の様。間違いようがない。

「火の国の王女だ！」

「何で私の事知つてんだ？」

優香は意外そうな顔で失礼にも人を指差して断言した男をまじまじと見つめる。どこかであつたか？いや、絶対ない。誰がこんなむさ苦しい男と知り合いなもんか。

「お前の手配書がこの国にまで来たんだよ」

声のした方に視線を向けると、碧眼という珍しい眼を持つ少年が立つていた。少年は優香達をジロジロ眺め、一つ頷く。

「後継者の証を見せてもらおう」

「なんだ？この偉そうなガキは」

年はたいして違わなそうだが・・・と連夜が小声で突っ込みを入れる。美零は近くにあつた椅子と机を隅っこに避難させ、のんびりお茶を飲んでいる。克弥がふあと欠伸をし、壁に寄り掛かる。空はこの後どうなるのか楽しみなのか、瞳をキラキラさせている。連夜は微苦笑を浮かべている。止めるでもないが、何かをするでもない。

「いいから見せろ」

「ちつ、仕方ないな」

優香は上着を脱ぎ、左袖を捲くる。そこには後継者の刻印、紅い文字で『火』。

「どうやら本物のようだな」

「お前はいつたい誰だよ」

「俺はサンダーライト国の王子、カツ・ルーネ・サンダーライトだ」「…………ええー…………』

驚きの声が酒場の全員の口から飛び出した。本人曰くサンダーライト国の王子、カツ・ルーネ・サンダーライトは満足そうに笑っていた。

「なるほど。三珠の社を探している訳か」

サンダーライト国首都 リディアルにある城、リストーラ城。優香達がいるのはその城の謁見の間だ。

「はい」

優香達の前にいるのが国王のカルイ・ルーネ・サンダーライトだ。名前の通り軽そうな顔だ。空と克弥と優香はこみ上げてくる笑いを必死に堪えている。国王はしばし考え込み、隣の息子をちらりとみて決めたとばかりに膝を叩く。

「よし。君達が三珠の社を探す手助けをしよう。必要なものは何でも揃えよう」

「え・・・よろしくんですか?」

風が丁寧な口調で思わずといった感じで聞き返す。今会つたばかりなのに何故そこまでしてくれるのか。国王は破顔して

「ああ。ルシーネの緋寒さんと聖藍さんと風華さんと翡翠さんには世話んなつてるからね。私達に出来ることなら何でもさせで欲しい」「ありがとうござります」

「ははは。そんなにかしこまらないでいい」

国王は大きく口を開けて笑い出す。そして笑い終えると近くに控えていた家来に命じていく。

「『』の者達を厩舎に案内し。そして一番合つ馬を差し上げる

「はつ」

「それから食料の用意と旅に必要と思われる物の用意を。急げ」

「はつ」

慌ただしく散つてていく家来達。さつき厩舎への案内を頼まれた家来は、優香達を先導する。その後にカツもついていく。

「乗馬は苦手」

克弥はいささか以上に引き攣つた顔でため息をつく。且乗馬の練習をしてたとき酷い目にあつたそつ・・・。連夜は意地悪げな顔でニヤニヤ笑い

「俺は得意だぜ。なんなら教えてやるつか?『お願いします、連夜様』って言つてみる。ほれほれ」

「俺も得意だぜ(やつたことないけど)。優しい俺様が教えてやろう。土下座して教えを請え」

「誰がツ」

囁み付きそうな勢いで振り返る。連夜は克弥の頭を撫で

「はいはい。怒らないでね、克君

「君付けすんな!」

空は克弥の肩を抱き

「そうかつかすんなよ。俺ら友達だろ」

「なつた覚えないわ!」

「つるさいな。もつと静かに歩きなよ」

風は不機嫌丸出しの顔で文句を言つ。克弥はまったく聞いておらず、空と連夜に飛び掛つてゐる。連夜はそれを軽くいなし、空は逆襲している。カツはそれらを見ながら今にもまざりたそうな顔をしている。だが王子としての立場を気にしてか、はたまたまざつていつのか迷つてゐるのか結局残念そつた顔をしながら歩いている。

「そろそろ厩舎に着きます」

案内してくれた人がそう言い、優香達は厩舎に目を向ける。そこには大きな厩舎が見えていた。

第三話 馬選びは大変？

「へえ。大きな厩舎」

優香が驚きの声を上げる。火の国にもこんなに大きな厩舎はないだろつ。さすがルーネ大陸で五位に入る大国。

「こちらで皆様に合う馬をお選びになつて下さい。もちろん乗つていただいても構いません。珍しい毛並みの者もいますので。皆様乗馬はご経験済みで？」

「私と連夜と克弥はね。美麗ちゃんと私は今日初めて。空は？」

「俺は何でも出来るぞ、天才だからな」

あえて無言を決め込む一同。

「では私が乗り方のご指導を承ります。よろしいですか？」

「お願いします」

二人は丁寧に頭を下げ、文字通り手取り足取り教わっている。優香と連夜と空は馬を見て周り、自分に合いそうな馬を探す。克弥は暗い顔で馬から精一杯離れている。どうやら馬も苦手らしい。

「この馬いいかも」

優香の目に留まったのは普通の馬より一回り大きく、火の国ではまったく見ない雪のように白い毛並みと青い目の美しい馬だった（この厩舎でもこの一頭しかいない）。その馬も優香の事が気に入つたのか、鼻面を押し付けてくる。案内人がこちらにやつてきてほおと声を上げる。

「見る目がござりますね。この馬は他の馬より見栄えが良いだけではなく、この国一の駿馬でござります。ですが誰にも懐かず、おまけに気性が荒いため乗り手がいなかつたのですが・・・驚きました」

「私・・・この馬にします」

優香は雪のように白い髪の手触りを楽しむ。その口元には優しい笑みが刻まれており、案内人は白い馬を厩舎から出しながらぼーっと

馬鹿みたいに見惚れている。それに連夜が氣づき、案内人に声をかける。

「聞きたいことがあるんですが、よろしいですか？」

「はつ・・・はい、すぐに」

案内人は慌てふためきつつ連夜の方に走っていく。空は佐田毛色の馬に乗つて、機嫌の様子だ。どうやら決まったみたい。

「凪と美麗ちゃんは決ました？」

馬の頭を撫でながら美麗達に聞くと、美麗は頷き凪は困ったように首を振る。

「美麗ちゃんの馬はどの子？」

「この子だよ~」

美麗が選んだ馬は、栢栗毛といつ毛色の馬だった。（栢栗毛とは、栗毛よりもやや暗い毛色。青毛の次に少ない。）足は結構速いそう。凪はどの馬がいいか自分でもわからず、困っているそつくな。

「毛並みは何がいいんだ？」

優香は一頭一頭見ながら凪に問つ。凪は「栗毛で」と答える。優香は栗毛の中でも足が速く大人しそうな奴を探す。

「こいつなんかどうだ？」

黒みを帯びた栗毛の馬を指す。一応乗つてみて、凪は驚いたような顔をして

「この子がいいかも」

「かもかよ」

「良かつたね。凪さん」

連夜の方を見てみると、青毛の馬に乗つていた。（青毛とは全身真っ黒の最も黒い毛色。季節により毛先が褐色を帯び青鹿毛に近くなることがある。比較的少ない毛色）。どうやら決まったようだ。残るは克弥だけ・・・なんだけど。

「克弥？」

「俺は馬が苦手なんだよ」

数メートル離れた場所から恐る恐るこちらを見ている克弥がいた。

て、どうか馬選べよ。アホ。空と連夜が一ヤツと笑い、佐目毛の馬と青毛の馬に乗つたまま克弥に近づく。克弥はゆっくり、だが確實に後ずさつていく。

「何で逃げんだよ。一緒に馬選ぼうぜ？・なあ

「そうそう。一緒に選ぼうよ。克弥くーん」

「こっち来んな

追い掛け回す空と連夜。逃げ惑つ克弥。確かに面白いが、そこまで必死に逃げなくてもという思いがないでもない。

「ハイハイ。遊んでないでさつさと選んで」

「うう。鬼か、お前は」

泣き声を上げつつも馬を見て回る。動きが若干以上にぎりちない気がするが、気にしない事にしよう。

克弥は一番最初の馬を指差し

「俺こいつでいい」

半分投げやりの口調だ。案内人は「ホントにいいんだな」という顔で月毛という白毛の次に珍しい毛並みの馬を克弥の方へ連れて行く。（月毛とは、クリーム系の色。金色にも見える馬体から好む人も多い。白毛の次に珍しい）克弥が手を伸ばす。刹那、馬の行動に案内人以外の全員が驚いた。何をしたのかというと、ブイと顔を背け尻尾がモロに克弥の頬にクリーンヒット。おまけに後ろ足で克弥の事を蹴り飛ばす。本人案内人以外の全員大爆笑。

「ここの馬は白毛のより気性が荒く、男性には決して懐かないのです」「先に言つとけよ」

克弥はがくりと項垂れる。案内人は申し訳なさそうに頭をかく。月毛の馬は小さく嘶き、馬鹿にしたように克弥を見下ろす。克弥は拳を握り締め

「上等だ。俺はこいつにする。俺を馬鹿にしたこと、後悔させてやる

とにかくにもこれでよつやくそれぞれの馬が決まったのだつた。

「忘れ物、すんなよ」

連夜の言葉に全員が持ち物を確認する。忘れ物なし。必要なものは全部持つた。いつでも出発できる。

「いろいろありがとうございました。食料に飲料水、さりご馬やり魔テント等たくさんいただきてしまつて・・・」

凪が丁寧にお礼を言つ。国王は大口を開けて笑い

「いいんだよ。困ったことが合つたらいつでも連絡してきなさい。出来る限り、力になろう」

「重ね重ねありが、「そろそろ行くか。楽しみだな～。」」ううつ冒険してみたかったんだよ。ワクワクする

箱入り娘が初めて城から出るんじやあるまじし、少しあはしゃあすが
じやないか。まあいいけど。

「お前いい加減觀念しろ!」

克弥の怒鳴り声が聞こえる。目を向けると、月毛の馬といまだに格闘している。まだ乗せてもらえないのかよ。こんなんで大丈夫か。心配になつてきた。

「一つだけ頼みがある」「

國史記一編

「我が息子、カツを連れてつてくれ」
『はつ！？』

思わず聞き返す優香達。カツは意外そうな顔で父を見て、次に優香達を見る。国王は息子の頃の手を置き

「カツは今まで首都リディアルから出たことがない。だから世界遺を見る国三は思二の頭に三を置き

を見せてやりたいのだ。他国を見、旅を経て、いろいろなことをして欲しい。王子としてではなく、一人の男として」

「まあ・・・私達は一向に構わないけど・・・。剣術とか攻撃魔法とか使える?夜盗とか山賊とかに襲われたとき、大変だよ?私達がいつでも護れる訳じやないし」

「私、治癒魔法しか使えない・・・。剣術は素人に毛が生えた程度しか・・・」「私、防御魔法しか使えない。剣技は素人以下・・・」

美麗と凪が落ち込んでいる。空が欠伸をしながら

「お前らには俺らが剣術叩き込んでやるよ。必要最低限、自分のみを守れるようにな」

「攻撃魔法も教えてあげるから落ち込むなよ。打たれ弱い奴らだな」優香の言葉がぐさりと突き刺さったのか、更に落ち込む二人。克弥は連夜に指を突きつけ

「こいつらに教えた後、俺と手合わせしろ」

「いいよ。ボツコボツにしてあげる」

「返り討ちにしてやる！」

「ハイハイ。出来んならね」

カツはそんな優香達を見て、決心したのか国王に

「俺、行つてくるよ。自分の目で世界を見たい」

「剣術と魔法は使えんの？」

「剣術は人並程度。魔法は中級魔法までなら」

優香達は軽く目を見開く。失礼だが、王族が・・・しかも王子が剣術と魔法を使えるとは思つてなかつた。確かルーシー・ネと違つてルーネは魔法を使える者が滅多にいないらしい。その代わりかわからないうが、ルーネは魔道具にたけているのだ。国王がくれたテントや食料と飲料水等を入れとく袋も魔道具だ。

袋の説明だけするが、この袋は食べ物や飲み物をどれだけ入れようと容量を超えない限り（その容量も桁外れ）いくらでも詰め込める便利な袋だ。食料用や飲み物用、更には着替え用やら家用やら種類は豊富だ。食べ物の場合は、中の物が腐らないようになっている。それに加え重くない。

「へえ、ちょっと意外」

克弥が正直に全員の心の声を代弁する。国王は柔らかい笑顔で息子を見て

「この子は魔法の才能があつたんですよ。属性は風。それから、警

告があります。心して聞いてください」

国王は一同を見回し、低い声で

「人目につくとこで魔法を使つてはいけません。これは覚えておいてください」

「何故ですか？」

美麗が不思議そうに聞く。ルシーネでは魔法を使うのが当たり前。そのためそのルシーネが全てだつた優香達にとって、魔法を使わないということは理解できないことなのだ。

「ルーネは魔法が廃れ始めた大陸。むしろ魔法を使える人間などこの世にいないと思ってる大人がいるくらいです。早い話、魔道具しか知らないんです。

我が国はルシーネと交流が盛んなため、魔法を使えるものは少數ですがいます。魔法があることも忘れてません。ですが、他国もそうとは限りません。

もし魔法をまつたく知らず、使える人を見たこともない国で君達が魔法を使えば、その国人達はどう思う？奇跡だと騒がれるならまだしも「魔女だ」「化け物」と言われる可能性は充分ある。ヘタすると殺される事だって考えられる。

それに入売り共や天上人の目に留まるかもしれない。

杞憂に終わればそれでいいが、そうでない確立の方が多い。とにかく注意しておくに越したことはない」

「わかりました」

「それからもう一つ、天上人には氣をつけて。金びかの上衣が目印です。これも覚えといて。そしてその天上人に会つたらそいつらが例え何をしても絶対に手を出さないこと。これだけは守つて。そいつらは聖地サンクロスにいる。もう一度言います。その聖地サンクロスで何が起こつても、例え目の前で人が殺されても絶対に天上人には手を出すな」

「・・・・・そろそろ行くか。国王さん、いろいろありがとうございます。馬に飛び乗り、礼を言う優香。他の人も馬に乗り、口々に礼を言う。

克弥は月毛の馬に無理矢理飛び乗る。月毛の馬は嫌そうに嘶き、しぶしぶといった風に大人しくなる。

「行つてきます！」

国王に手を振り、一行の旅が始まった。

第四話 驚きの事実

「そういえば、次の目的地は？」

しばらく歩いてから凪が優香に優香に聞く。優香は首を傾げ

「知らん」

「だから知らん」

「『知らん』じゃないでしょー。急いで国王に聞きに戻らなきゃ……」

「 凪が馬首を返そうとしたとき、カツがため息をつきつつ鞆から地図
らしき物を取り出して、凪に投げる。

「わっ・・・と・・・地図か。ありがた・・」

地図を広げた瞬間、語尾が消え凪は固まってしまった。凪の近くに
いた美麗が凪の横へ馬を寄せ、地図を覗き込む。そのまま十秒ほど
黙り込み、何もなかつたかのように座り直す。

「その沈黙は何？」

連夜はくつくつと笑いながら一人に聞くが、美零は黙つて笑うのみ。
凪に至つては硬直したまま動かない。いつたいどうしたのだろうか。
克弥は凪の手から地図を引つたくなり、広げる。連夜と空と優香も近
くにいつて地図を見る。

書かれているのは蝶下手くそな一応地図みたいなもの。地形はどう
かわからないが、国と首都がバラバラだ。とてもじゃないがルーネ
大陸の地図とは思えない。というか空想上の地図に思える。

地図の左端には同じく下手くそな字で「*b yカルイ（笑）*」と書い
てあるので、これを書いた大ばか者の正体はわかつた。

克弥は無言で地図もどきを握り潰す。連夜は軽やかな笑い声をあげ、
膝を叩いている。彼には受けたらしい。よかつたな、国王。

優香は馬首を返そうとして空に止められている。その空も怒りの焰
を立ち上らせてくる。

カツはそれらの反応を見て、あ～らうと言わんばかりの顔で空を仰いだ。今日は突き抜けるほどの青空だ。良い一日になりそうだ。

その後近くの店で確かに地図を買い、一行はサンダーライト国の南に位置する化け猫村を目指ことにした。理由は簡単。店の人曰く「そこには一足歩行する猫や人型をとる猫や喋る猫、更に尻尾が二本以上ある猫がいるって噂があつてな。そこには誰も寄りつかないんだよ。今から二十年以上も前に廃村になつてる。皆、気味悪がつてるんだ。あんた方も行かない方が身の為だよ」という言葉を聞き、美麗と優香と連夜と空と克弥が『行きたい』と言いだし、凧とカツの反対を押し切り行くことになつたのだ。

「美麗ちゃんつて猫好きなんだ」

優香は馬上で伸びをしつつ言うと、美麗は一瞬驚いたような顔をして、すぐに納得したように頷き

「そうだよ。猫ちゃんラブ」

「私は断然犬派だけど、猫も可愛いよね。空達はどうち派？」

後方に声をかける。空達は顔を見合わせ、凧から順に連夜、空、力ツ、克弥という順で答えていく。

「犬かな」「俺は断然犬派」「犬・・・・かなう。どっちも」「猫派」「猫は苦手。なに考えてんのかわかんないし、身勝手だから。主人に忠実な犬は好き」

そんな理由かよ。全員が心の中で突っ込む。

「動物繫がりで思い出したけど、皆馬の名前決めたか？」

連夜が馬の首を擦りながら今氣付いたと言わんばかりの顔で周囲を見回す。ある者は頷き、ある者は今頃ながら考え込む。どうやら決めてない者がいたらしい。頷いた者が馬に手を当て、名を言つ。

「馬の名はアクア。お腹にある模様が水みたいだから」

わざわざ名前の由来まで話してくれた凧。次いで克弥が偉そうに胸を張り

「俺の馬は馬鹿馬。いい名前だろ？」

いい名前もなにも・・・・すでに名前としてどうかと思つが。といふか私が月毛の馬だつたら絶対に嫌だ。抗議する。

案の定月毛の馬は怒りを露にし、暴れ始める。暴れるだけでなく、嘶いている。馬ではないのでなんと言つているのかわからないうが、おそらく「ネーミングセンス悪過ぎだ!!」マグマで顔洗つて出直せツ」的な事を言つてそうだ。いや、あの様子では更に口汚く罵つてるのかかもしれない・・・。

連夜と凪とカツが器用にも馬の上で笑い転げている。美麗も口元を押さえて笑つてるし、空など大口を開けて人目を憚らず笑つている。周囲の人々が何事かと凝視してしまうほどの音量だ。

優香は馬の上で蹲つてゐる。必死に笑いを押し殺してゐるようだが、声が漏れている。克弥は落馬しないよう懸命に体勢を保つてゐる。落馬したが最後、踏み潰されて痛い所の騒ぎではない。最悪の場合、そのまま天へ・・・・なーんてことになりかねない。

「別の名前つけてあげなよ。そしたら大人しくなるかもよ?」と凪が提案しても「なんか負けたみたいで悔しいから嫌だ」と即座に答えが返つてきた。

「じゃあ私が名前付けてあげるよ。ムーンつてのはどう?」つちで月つて意味だよ」月毛の馬は暴れるのを止め、嬉しそうに美麗に擦り寄る。どうやら氣に入つたらしい。克弥はほつとため息を漏らし、頭をかく。しばらくそうして、投げやりな口調で

「わーつたよ。ムーンな、ムーンつて呼べばいいんだひ。つくそ」ブツブツ言しながらムーンの鬚に触れる。ムーンは首を左右に振り、嫌そうな雰囲気を体中から滲み出す。克弥は笑顔でムーンに「やつぱお前、アホ馬だな」と言い、喧嘩勃発。とことん合わないらしい。

優香は白い見事な鬚に手を置き、決めたとばかりに膝を叩き
「スノー・・・。スノーつてのはどう?こっちでは雪つていう意味なんだ。お前の白い姿にはぴつたりだと思うんだけど」

セリフが終わるか終わらないかのうちに、スノーは嬉しそうに嘶く。優香はスノーの頭をぽんぽん撫で

「決まりだね。よろしく、スノー」

スノーは（偶然に違いないが）頷く。実にタイミングがいい。連夜と空とカツと美麗はそれぞれ難しい顔で考え込んでいた。そこからいち早く抜けたのは、美麗と連夜だった。先に美麗が

「この子の名前はリーフ。額に葉っぱみたいな形の痣があるから」

「こいつの名はナイト。夜闇のような黒い体には似合いの名前だろ」「二人の馬はニカツと笑う。返事のつもりだろうか？ 空はうーんと唸り、突然閃いたのか膝ではなく馬を叩く。馬はてきめんに機嫌を悪くし、空を振り落とす。

「痛つて～。そうだ、名前決めたんだ。ライリ」

「俺のはサンダーツていうんだ。いい名だろ」

「故国の取ったのか」

「うん。俺、あの国が好きなんだ」

照れ臭そうに微笑むカツ。そんなカツを見て、優香はどこか寂しそうな顔をする。故国、か。ついこの間まではそこにいるのを当たり前だと思ってたのに・・・まさか旅に出ることになるとは。しかもあるかども定かではない三珠の社を探す旅とは。緋寒に言ったらどうなるかな・・・。きっとこう言つだらう。「そんな訳わからぬものを探す暇があるんなら仕事しろ！ それか剣術でも磨いてろ、アホ」とか言いそう。いや、もしかしたら「行つてもいいぞ。その代わりに帰つてきたらその間に溜まった書類を徹夜で片付けてもらおう。それでもいいか」とかかな。うん。こっちのが言いそうだ。

「くつ」

想像上とはいえあまりに的を射ている気がして思わず笑みが零れた。何故だろ？ ついこの間緋寒に会つていてるのに、もつ一年ぐらい会つてない気がする。髪も伸びてる気がするし・・・。まつ氣のせいだろ。

「会いたいな

ポロッと口から漏れた言葉を、連夜が聞いてたみたいで

「誰にだ？」

「えっと・・・耳良いね。緋寒にだよ。もう一、一年会つてない気がするんだよ」

そう言つと、連夜は顔を顰めて難しい顔で考え込む。どうやら連夜にも心当たりがあるようだ。周りを見ると、美麗と克弥も同じようく首を傾げている。

「それもそうだろうな。お前らが消えて一年半も経つてんだから」「一同はそれぞれの体勢のまま音を立てて固まる。そしてぎこちなく首を回し、ロボットのような口調で

「ナンダツテ？」

「だ・か・ら、お前らが消えてから一年半経つてんだって。なんだ、知らなかつたのか？」

知らなかつたとも。初耳だ。凪の方へ視線を流すと、凪は無言で頷き止めをさしてくれた。空が暢気な声で

「ああ、言い忘れてたがお前らの体もちゃんと一年分成長してるから安心しろ。その証拠に髪とか身長とか伸びてるだろ？それに優香の傷口も塞がつてゐるし」

「傷？」

なんだそれは、と顔を顰める優香。私がいつ傷を負つたんだ？全く記憶にないんだが。美麗と連夜と克弥と凪はいっせいにこっちを見て詰め寄ってきた。

「ちょっと背中見せて」「さつさと脱げ」「すつかり忘れてた」「早く！」

勢いに押されて優香は引き攣った笑みを浮かべる。一体全体何がどうしたというのだろうか。服を捲ると、四人が息を呑む氣配がする。なんなのだろうか。

「傷が・・・」

驚いたような声が後ろから聞こえる。辛抱強く待つていると、空が

「なつ？ 塞がつてんだろ」

優香の背中には歪な傷口があつた。そこは連夜が斬り付けた傷だ。一応塞がつてはいるが、激しい運動をすれば開いてしまうだろう。

「用心の為治癒しつくね

第五話 最初の宿

治癒が終わる頃にはすっかり日が暮れて辺りは真っ暗になっていた。

「ねえ、化け猫村までどのくらいかかるの？」

ずっと疑問に思つてた事を口にする凪。優香は近くに宿はないかときょろきょろしながら世間話をするよつた軽い口調で

「一週間」

「・・・・一週間？」

「そつ、一週間だよ」

沈黙を返す凪。優香の顔を見る限り、冗談ではなさそうだ。そしてさもついでと言わんばかりにこづ付け足す。

「そうそう。まともな宿に泊まれんのはあと五日くらいしかないからな。あとはずっと野宿みたいだ。国王がそう言つてた。魔獣とかに襲われないようにつてさ」

「そうだな。この速度で行つたらあと六日後ぐらいには『人食いの森』に入るからな。用心しといた方がいいぞ。あそこは『禁断の森』の次の次ぐらいに危険な森らしいから」

カツが余計な補足をしてくれた。凪は表情こそ変えなかつたが、心中では悲鳴を上げていた。『人食いの森』ってなんだよッ。物凄く嫌な予感がするんですけど。行きたくねえ。

「退屈しなさそうでなによりだ」

克弥は心底楽しそうな声で掌に拳をぶつける。早くも行く気満々だ。だめだ。こいつとは精神構造が違いすぎる。

「どんな猛獸がいんのかなー。戦つてみてえ」

優香がまだ見ぬ魔獣に期待を膨らませながら鞘を鳴らす。どんだけ戦いが好きなんだよ。美麗の方を見てみると、流麗な字で和紙に何かを書いている。横から覗き込み声に出して読んでみる。

「えーと。浅緑 美麗、六日後に魔獣に食べられて死亡。骨が残つていたら故国に埋めて下さい・・・って遺書書くな！」

美麗の手から和紙を取り上げて破り捨てる。美麗はお茶を飲みつつ
ほぼ棒読みの声で

「なにするのさー。せっかく綺麗に書けたのに」

「遺書を綺麗に書いてどーすんだ。まつたく」

ぶつぶつ言いつつ空と連夜に視線を流す。

「やつぱりグリフォンとかいんのか？あとはケロベロスとか」

「目撃情報は数多に寄せられます。が、ほとんどは見間違いとかデマですね。それに『人食いの森』に入つて出てこられた人は滅多にいないんですよ」

「出てこられた人は滅多にいない？おいおい。『禁断の森』と同じくらい危険なんじやないのか？そんなとこに向かつてんのかよ。これは遺書を書いといた方がいいかもしね」

「へえ。まつ魔獣が襲つてきたら返り討ちにしてやるよ」

不敵な笑みを浮かべる連や。その瞳は好戦的に輝いている。あ～あ。これじやあ行きたくないって言つても無駄そう。

「あのさ。迂回とか出来ないの？」

「迂回ルートもあるけど、そっちからいくと一ヶ月ぐらいかかるよ」

「そーなんだ」

「こりやもうだめだ。遺書でも書いとこ。凪がそんなことを考えていると

「安心しろ。『人食いの森』に入る前に自分の命は守れるだけの剣術、叩き込んでやる。まあいざとなつたら防御魔法使って隅っこで縮こまつてろ」

空がさりげにムカつくことをさらりと言つてきた。無言で拳を振りかぶる。

ガン

「痛つ・・・・にすんだよ。暴力魔人」

「黙れ。役に立たないダメ珠」

「うつさい。防御魔法しか能がないダメ後継者」

『んだとコラ！』

睨みあつていてると優香がため息まじりに

「どうでもいいけど、喧嘩なら他所でやつて。今夜の宿はここにし

ようと思つ。部屋は三人一組と四人一組ね」

「そんなら今決めよう。どう決める

「てきとーでいいじゃん」

優香がめんどくさそうに目を眇める。今日一日だけでいろいろあり過ぎてくたくなのだ。頭の中は「飯食つて風呂入つて寝る」で一杯だった。

「男女で一部屋ずつ。はい、決定」

渚が勝手に決め、一同は宿へ入つていった。

中は酒場も兼ねていてるようで人でごけた返していた。そちら中から

話し声が飛び交い、大変やかましい。

優香はあからさまに嫌そうに顔を顰めてカウンターに向かう。とつとつ飯食つて風呂入つて寝たい。

「七人なんだけど空きある?」

「席かい? それとも部屋かい

「どうちも

「運が良いね。部屋は二部屋空きがある。席もあそこが空いてるだろ? そこに座んな。今飲み物と食い物持つてつてやるよ」

「どーも。馬はどうすればいい?」

「店の隣に厩舎がある。そこに連れてけ。餌も置いてある」

鍵を受け取り、美麗達の元に戻つて今話した事を伝える。そして女性陣が席に座り、男性陣が馬を厩舎に連れて行く。

「疲れた~。腹減った~。喉渴いた~」

空が机に突つ伏して文句をたれる。凧が頬杖をついて空を見下ろしはつと嘲笑する。

「黙つて待つことも出来ないんだ。お子様だね」

「俺は人型とつたの初めてなんだよ。こんなに疲れて腹減つて喉渴くなんて知らなかつたんだよ」

全然自慢にならないことを胸を張つて言い切る空。凧はそんな空を

上から下までじつくり眺め、ふかいため息をつく。空の額にさわりとしわが寄る。

「何か言いたい事で？」

「あ、別に。こいつ馬鹿じゃん、なんてこれっぽっちも思つてないから」

「思つてんじゃねえかよ！」

「空、うるせー」

連夜が髪をぐしゃぐしゃにしながら注意する。彼の横では克弥はこつくりこつくりと船を漕ぎ出している。連夜もどことなく眠そうだ。「ほい、お待たせ。冷たい飲み物と店の看板メニューだ。あんたら旅の人だろ？今のうちに腹いっぱい食つときな。じつから先に行くんなら満足に飯が出る宿少なくなるからな」

「何で旅の人つてわかつたんですか？」

美麗が不思議そうに問う。まあ確かに今さつき旅に出たところだが。「ここいらは馬なんて滅多に使わないからね。十中八九旅人つて思つたんだよ。それにその服装。こじらじや見かけない服装だからね。特にさつき私に話しかけてきたあんたの服装。上から下まで全部黒衣つてのも珍しいね」

「黒が好きなんです」

優香は曖昧に笑つて答える。ゆづくらしてつてね、といつて去つていく店主の言葉に頷き、一同はい飯を食べ始める。

「おーい。飯が来たぞ」

カツが片手で飯を食べながら片手で克弥を搔する。睨み合つてた空と風もひとまず休戦して無心で飯を食べ進める。

「まずは体力をつけろ」

腹一杯ご飯を食べ、風呂にも入りたあ寝ようとしたところでも空が風にそう言つた。

「はー？」

風がベッドに入ろうとした体制のまま問い返す。ちなみに優香は美

麗に傷の手当をしてもらっている。実は風呂に入る前に連夜と一試合やつたのだが、そのときに背中の傷が開いてしまったのだ。まあちょっとやそっとで開くような傷ではないのだが、優香が無茶な動きをしたせいで綺麗に開いてしまったのだ。

それから男性陣はすでに全員夢の世界に旅立つてゐるらしい。

「だ・か・ら、もつと体力つける。そうじやなきや持久戦になつたとき速攻でふつ倒されるぞ。そうじやなくともお前は他の奴より運動神経も体力も技量も劣つてんだから」

さりげに酷い言ひようだ。凧は出そうになつた怒声を寸前で呑み込む。代わりにゆっくり深呼吸する。

「つまり、何が言いたい訳

苦労していつも通りの声を出す事に成功した凧。空はうへんと顎に手をやり

「そうだな。今日はとりあえず負けといつてやるとして、明日の朝から軽いランニング十キロと素振り、筋トレ、攻撃魔法の下級魔法を教えてやる」

「・・・・・ランニング何キロだつて・・・?

「十キロぐらいでいいんじやん? 最初だし」

「・・・・・・・・・・・十キロ・・・?」

オウム返しに問いか返す凧。十キロって言つた? 私の事体力ないつてわかつてながら十キロって言つた? 普通に無理なんでスケド。つか私を殺す氣だろ。そうとしか思えない。ランニングで死ぬつてふざけた死に方にも程があるわッ!! と心の中で文句を言つてゐるものの、声にならない。ただ口がパクパク動くのみ。

「じゃ、そーいうことでおやすみ」

空がどこか晴れ晴れとした顔で部屋を出て行こうとする。凧はそのときになつてようやく正気に戻る。彼女の体から蒼い魔力オーラが漏れ出し、不可視の力で肩まで伸びた髪が風もないのに浮き上がる。それと同時に空の横を何かが通り過ぎ、音を立てて壁に突き刺さる。一拍遅れて頬から血が流れる。

「 ちょっとといいかな・・・」

彼女の周囲に氷柱がいくつも出来る。空は薄ら笑いを浮かべ、ゆつくりと視線を横に向けると、特大の氷柱が突き刺さっていた。その顔から見る見る血の気が引いていく。

「十キロって言つたの訂正してくれませんか？」

いやに丁寧な口調でにっこり微笑む。物凄く嫌な予感がするのだが氣のせいにするにはちょっと無理がある。

「えつと・・・凪さん？」

気付かれないように一步一歩後ずさる。凪の顔にすうと冷たい笑みが刻まれる。

「 ちょっと・・・やめつ・・・ぎやー」

空の悲鳴があがると同時に氷柱が空を襲う。それらを必死に避けながら逃げ惑う空。が、いかんせん数が多くて全て避け続けるのは不可能だつた。空の頬が切れ、つうと血が流れる。髪も何本か犠牲になりバラバラと散つていく。

「 ちょっと・・・これはさすがにヤバイ気が・・・つと」

突然目の前に壁が出来、急停止する。するとその壁がなくなり、代わりにその後ろから克弥が出てきた。

「 空、何してんだ？ そんなに慌てて・・・。お前もトイレか？」

「 克弥・・・助かった。あいつ止めてくれ」

空が指差す方向を何気なく見て、克弥の顔からも血の気が引いてぐ。そしてなにも見なかつたような顔をして、部屋に戻ろうとする。

「 おいッ！ 僕を見捨てる気か」

「 馬鹿言え！ お前が蒔いた種だろうが。後始末は自分でやれ！ 出来ないなら最初つから種を蒔くな」

正論だ。空はなにも言い返せず黙り込む。そこにちょっと以上に危ない雰囲気を纏つた凪がやつて來た。一人は口元を引き攣らせて顔を見合わせる。

「 死ねや」

「 却下ぐ！」

男一人の悲鳴がボロッちい宿に響き渡った。

翌日

カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。美麗と優香はべつすりと眠っている。

「・・・ん・・・右だよ・・・右つてんだろ～が
優香が意味不明な事をブツブツ言つている。起きているのかと思つたが、目は閉じている。どうやら寝言らしい。

「右だつて何度も言わせんだ！左は絆寒の鼻の中だ！」

がばつと起き上がり荒い呼吸を繰り返す。そして左右を何度も見てなにもないことに気付くと、はあとため息を漏らす。

「よかつた。覚えてないけどとてもなく最悪の夢を見てた気がする」

頬をパチパチ叩き眠氣を払う。ベッドから降りて大きく伸びをし、窓を開ける。心地良い風が顔に当たる。

「いい風だ。それにいい天氣だ。今日はいい一日になりそう」「そう言つて何気なく見やつた凪が寝てたベッドに凪の姿がないことに遅まきながら気付き、首を傾げる。

「こんな朝早くからどこ行つたんだ？」

「そんなに朝早くじゃないよ。今十時過ぎだし」

声のした方に目をやると、物凄く疲れた顔をした汗まみれの凪がいた。しかも泥だらけだ。いつたい何をしてきたのやら。

「どこ行つてたんだ？」

「空と克弥と体力づくりしてた」

その言葉には嫌という感情が込められていた。

「ふーん。私もそろそろ美麗ちゃんとカツに剣技と攻撃魔法教えないとな・・・。私誰かに教えるのとか苦手なんだけどなあ・・・」
さつさと着替えつつぱりぱり頭をかぐ。これは本音だ。自分は誰かに教えられるほど剣技が秀てる訳じゃないし、攻撃魔法だつてそ

れが一番自分に合つたからであつて得意つて訳じゃないし……。まつやると決めたからにはやるけどね。まず美麗ちゃんは体力をつけてさせて、カツは魔力を高めさせないと。上級はかなりの魔力と体力、精神力を使うから。あとは克弥に乗馬のコツを教えてやらないと。

自分の世界へトリップした優香をしり目に凪は汗拭い、泥だらけの服を魔法で洗う。そうしているうちに美麗も起き、着替える。そういうしてこるうちに十一時近くになり、連夜達が部屋に入ってきた。

「そろそろ出発しないか？準備も整つたし」

「ノックくらいしてよ。親しき仲にも礼儀ありつて言葉知らないわけ？」

凪がギロリと（特に空を）睨みつける。空は少し驚いたように目を瞬き、苦笑する。いつも通り上下を黒で固めた優香は腰に刀を差し、荷物を背負い

「よし、行くか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7900x/>

三珠の社と記憶を探す旅

2011年11月20日12時52分発行